報讎
奇談

# 自來也說話

へ13
3529
3

へ13
3329
3

# 報仇奇談自来也説話巻之三

感和亭鬼武著
高喜齊校合

大正十年八月廿九日寄贈
本大學出版部

## 武江

勇正村逢衣重 併 鹿野苑譏言条

群吏朋黨各進所親招拳狂狷仁賢背公立私同位相訕是謂乱源さまたげば自来也獄舎を破り逃げ出でば城門まで大に驚迫る手分手一草をかくす自来也と呼れども更に行衆ハ知ざる事勇源太郎義自来也乃捕まて児子侶吉の共形ハ黒姫山に隠れぬと自来也出ず役形ハ到る所と期ひ知れぬ今更侶吉の捜求め連来る流石厳早主人に預ひ諸国を

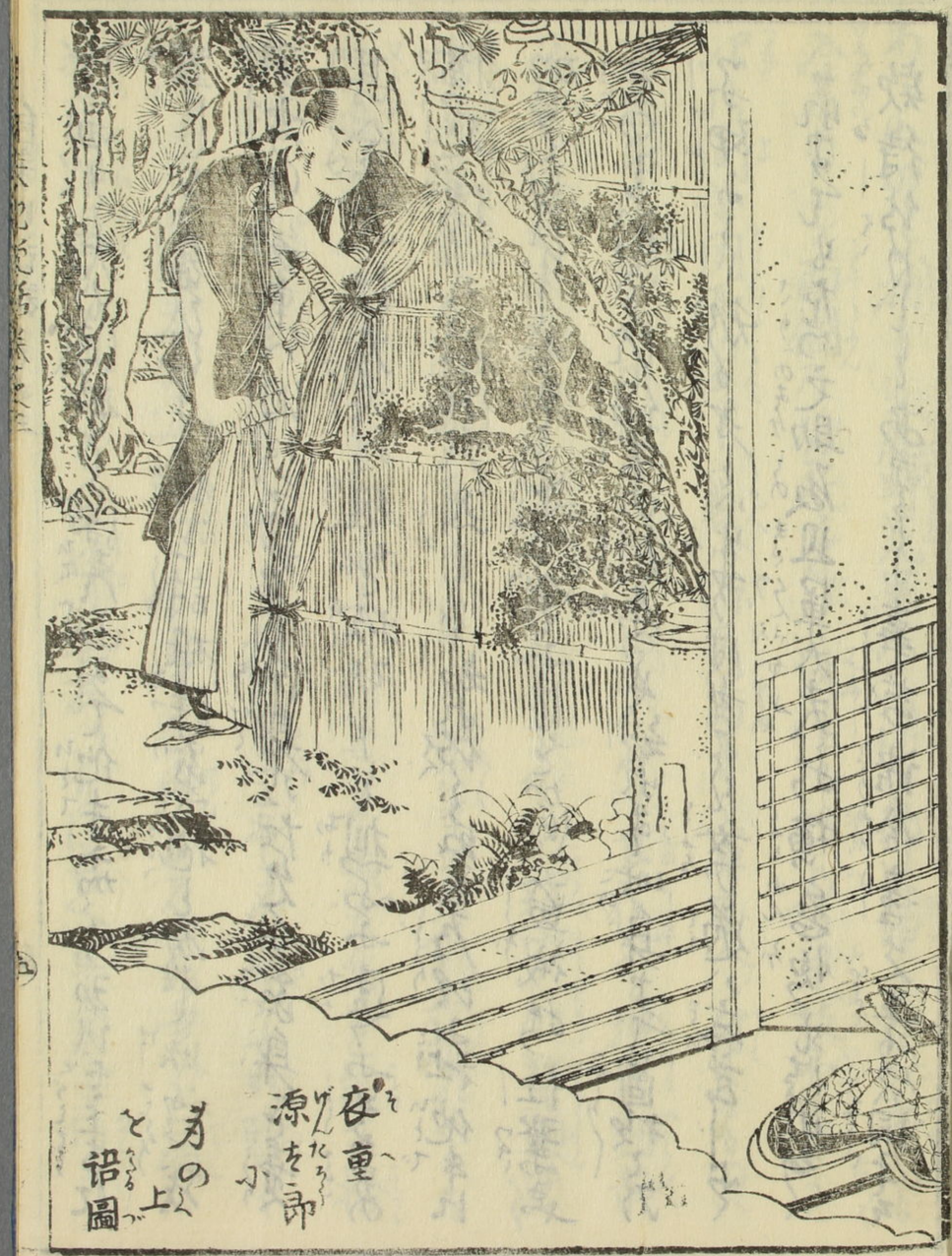
巡り敵を尋ぬやと思ひ給へ侍るに、児子うるさく加て是
手繦ひ申く先是迄の打捨多人と申侍ふる所の奴ども
押移源太郎 始より多人と契約あるまじ何卒法を過り
父より讐を撰んと云事なれば生べく想ふ折柄城主の子息
花門之助国時妾狂ひ身持放埒同くあるて藩中の
取沙汰とも成り侍るべく源太郎国時の放蕩を見
起りを制御孝生なれば多く撰べ申べと
中あれども妾だに遠さけ来べ自 当時の放埒を悔も除べ
乃去ぬ不見女ならば素何なる婦人ぞ人殺那
別差べ行 秘よ楽に見を加く若殿の放蕩を止めやと



忠義一國に知れ渡れば世事一個まて計ひて他の誹謗も
あらんと鹿野苑軍太夫に知と商儀ば一時に軍太夫のいく
ら我れ兼て心得 故是迄婦人よ見も如 ば多南
花つ之助殿ふ不便ぞ若殿の楽成殿を諫りんと撰の
行状あるよ申 何事も殿役所に到り能よ計ひ申べ
くこの方新んらけれ手助なりうんと已が進ん事を
押色け忠臣新よ源太郎と勘ぬ妨る清姫 野沢
るの時くの軍大夫ハ楽ふんと遂ひ申あるぬ者ぞ今は
て申 新よ申事を見ぬ更ようけ申ざる申 御ぞハ和
ふよ成ん座所 申 あり時ぬと方つ之助を知ぬ

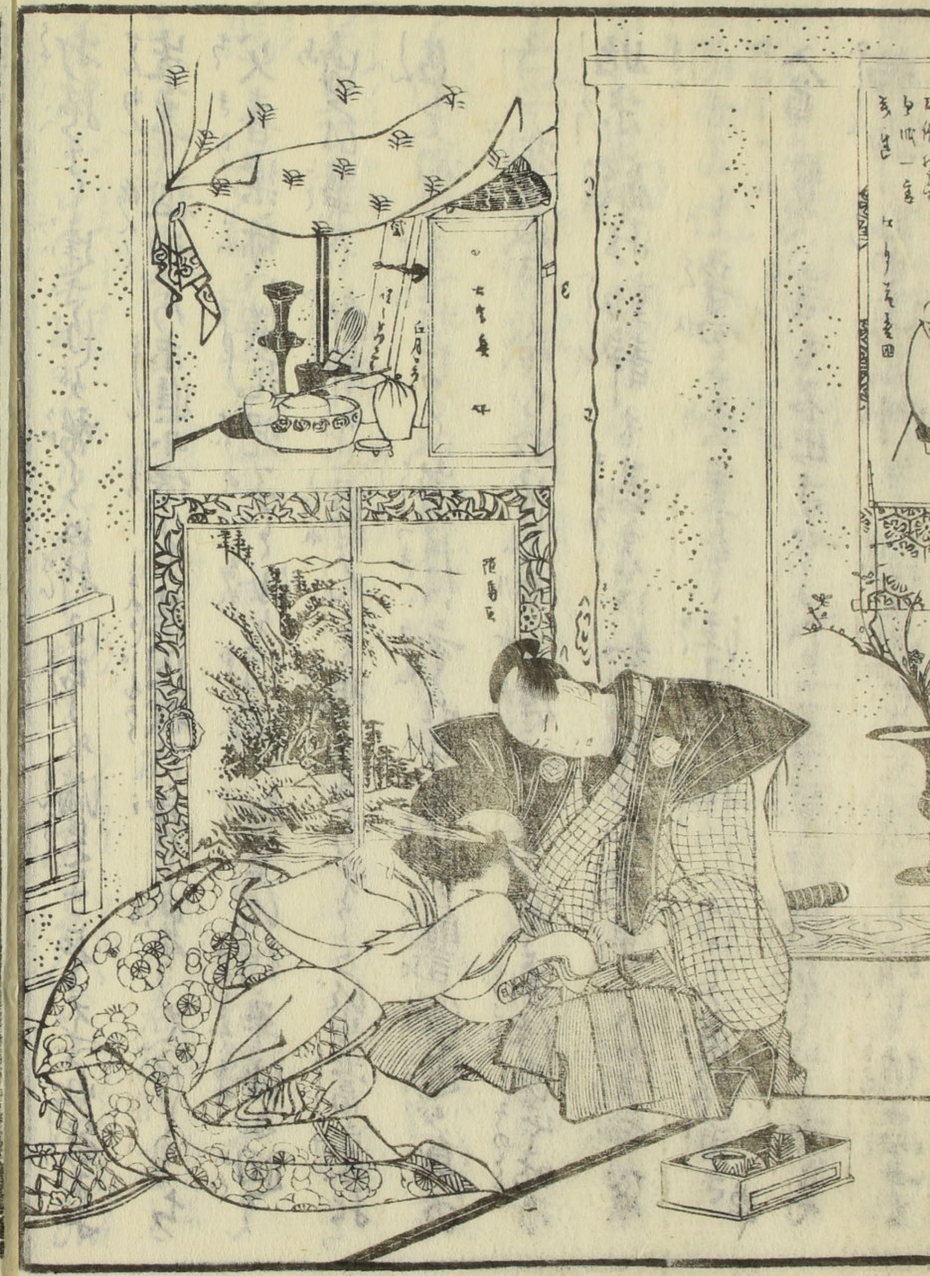
鹿野苑ゞ申事ゝ何事ゝも貴くしとあがるゝも尊ゝ
源ゝ八軍太夫と申ス今世邪刀荒ふ到り書ゝとゝ
ゝ為の使の者と俗り大坐ゝ御ゝ後ゝ程ゝ清ゝ
ゝ八早枝と咲ゝ有ゝ為ゝ方ゝ之助ゝ様ゝ関ゝ
立ゝ出ゝ人ゝ為ゝ八夫の西村復源ゝ也ゝ年月八働ゝ
只遠ゝ人ゝ也ゝ有ゝ為ゝ妻の良重ゝ申ゝ事ゝ言
呆果ゝ者ゝ様ゝ偽ゝ有ゝ後ゝ人ゝ方ゝ者ゝ良重八悲ゝ
悲ゝ様ゝ這ゝ世ゝ者ゝ八ゝ様ゝ源ゝ方ゝ様ゝ
ゝ方ゝ源ゝ方ゝ事ゝ今八若ゝ者ゝ妻と
ゝ様ゝ先ゝ子ゝ申ゝ方ゝ捕ゝ家遠ゝ長ゝ

打絶ゝ達ゝ様ゝ者ゝ様ゝ満ゝ年ゝ
先年祖税乃未進ゝ依ゝ某囚獄乃身と罪ゝ
父喜楽弥八横死児子と汝ゞ行清八知ゝ
遂ゝ事乃動静を尋ゝと想ゝ内ゝ富家
宿と彼ゝ是非ゝ歳月八ゝ
ゝ想ゝ日ゝ身の
姫未敵ゝ動静も其方八知ゝ
同せゝ尋ゝ衣重ゝ泣ゝ
入尊覧ゝ言も不出ゝ
動静ゝ汝ゞ何ゝ



夜重源七郎

月の上と語圖



り出でて夫も泪ながらに涙を山まで他手かりうちひきたる
薬をしを慕ひ給へ猟を討椎津家へ抱と給へし 路次 戎
国まつけ 衣重ハ泪にくれなゐ 身乃たもと 袖身を責
其金力へに丈夫ハ雑を殺ひしと想ふ遠ふ者の
横死 傷乃 紅 戎 ひしと知れ給ふ 乃 ぬ 他手に
かるとひしと 定て 合 目を かけ 血 絹 仕業
夫のうかゝん 倍吉の行 も 知れ 此 身 迄 菌 と乃
子 神 ふ 知 る 者 と ハ 者 ハ 者 女 の 道 ハ 忘 者 ゆ
これすでも たつ之助 反 且 軍太夫 ハ 横 意 恨 ハ 者
歎 待 待 し と 者 ハ 事 ハ 語 合 喜 ハ 立 ハ 泪 て 者



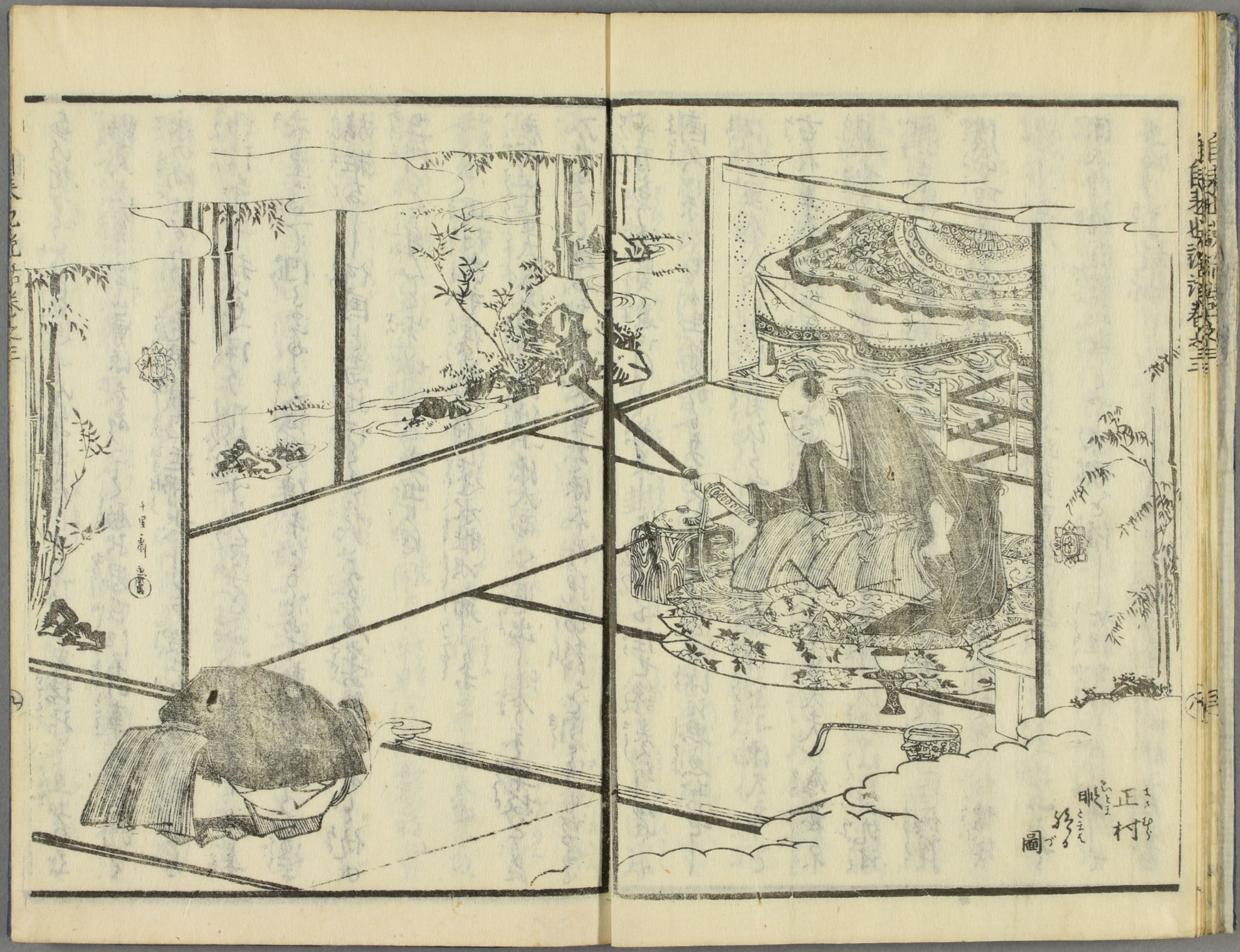
ありぬ如る 称 も 鹿野 苑 軍太夫 源 大 命 に 泪 ぬ ハ 事 ハ
入 者 し ゞ 両 個 乃 ハ 者 ハ 者 説 話 に 泣 乃 早 枝 ハ 審 さ と
沢 ハ 間 小 間 耳 ハ 者 者 親 バ 源 彦 山 ま く 軍太夫 ゞ 討 る ハ
源 大 命 の 親 者 ゆ 敵 と い ゆ ハ ゆ 者 ゆ 其 仇 を 捜 求 動 静
又 早 枝 ハ 源 太 命 ハ 妻 女 ハ 者 ま で 不 殘 ゆ 取 驚 顔 を
溜 息 継 佐 も 浮 ゆ 事 ハ れ ど も 樂 等 ゞ 身 の 上 知 れ ハ 者
弟 武 運 ハ 歩 ゞ ゞ ハ 此 上 ハ 折 を 取 て 源 太 命 を 討 て 捨
早 枝 を 己 ゞ 妻 ゆ せ ま ゆ と 想 ひ 立 こ ま ゞ 不 敵 ち ゆ れ 皆 く
あ ハ く 軍太夫 ハ 笑 拂 て 入 て 今 る 折 ゆ よ ん せ ぬ ま で 二 個 ハ
驚 花 跳 退 く さ ま ハ ぬ 姿 ハ あ ハ ハ 原 ゆ く 軍太夫 ハ 何 ハ

那知風情ゑ歟待奈何正村殿早枝殿の得んあやまり是
加へ孤ひ〜ゑやと四ひらく書ぞ添ちゝも伝ってい〜〜く
先刻ちう委細ゆ伝せ〜〜とこ伝世うへ古早枝殿より
若殿へ四昊見ちうんとの事伝れぞ昊下よりも高と馬あ他
早枝どのゆ伝家ゆ与免伝ふたのみ扨ると西個ち言ゆ
伝書ちゆ間会ゆ扶持も性卒ちると勇鹿野苑ハ立汝ま
志ちあらべゆちうゑんと西個一同ま立ゆめ衣重ハ話も言
殊〜夫ゆん果るれど何と論ると洞を色ゆ見送る礼義
乃表面素と乎ひま式祝ち〜正村景国打連立
城門さてで立帰ぬ那て軍奈ゑ添古命ぐ敵を覗ま

ゆ〜を立関ぬゆれだ伝れゆ邪ゑ広ちる添古命先送ち色を
ゆて城門ゑ追排ひ途ゆおれゆて人知れぬ討ゑ殺ゑ我身も
計と事ゆ〜納りなんと左門ち助に密ゆいへ〜〜叔ハ勇源太郎
ちと伝ゆ扶ゆちう留〜お枝どのゆ見ゆを加へ申さんと楽
一個伝別ゑ〜ゆ〜あとゑ古と基ゆあうて動静を親知ま
異見と伝ち楽素ちゆの〜中が世ゆと見へ歩ひて手ま見と
殿ち過越方ゆ説話を做〜流行文ゆあべ〜ゆあう思
光景ゆて剣へ早枝どのを延連立足ん古で約せる動静うれ
ゆへゆ二新ち是迫ひ伝ん不送と言ゆ〜〜と言を歩ち
中せ〜ゆ〜国時大ゆせちせられ憎那奴系西個ちゆ伝ま

あさましやと一図にせまりけるを單太夫押止め今宵ろんとも此の方に穏れ
忍れども此の某に御任せあるべし大守へ訴上し業平のまで内擔聞ん哉
追拂ひのせ中さんことは某さへあらば鎌を投かけて忍ふ源太を
捕なし早枝は己が手に入れんと功の動静も知らしめ給ふへきの助は
單太夫が言を用ひ汝より計らひと計らひ程なく時を移して鹿野苑
国久が前にまかり折を窺ひ討んよしと讒しいつて勇武
こととし身持悪しかるべし力のおさまりかね比節は不義の妾と
私情を通じ其上左門のまけども放蕩哉進んで申も入れ
源太郎乃ありさまにあるべからず不届者と某同席にて
なし放擲に拘りせん事封内に聞へても浮名何共迷惑

千万あり御賢慮下されて然るべしと佞辯に任せ讒奏すれば流石
国久は源太郎が生質かくあるとはおもはさりしが此思ひの外しせし
体に單太夫はことばを用ひられ程なく勘気の身となり源太郎を
召れ單太夫は汝を佞弱なる悪敷ことを申立れども單太夫が底意不
見届と汝あしければ父がいとほしみさん無礼あさましき汝が心の仇討
暇を遣し表向は身が心に不叶あるを此の暇と其体となし仇討
後功を立て帰参をまつ侍疾発足の調度なし胸懐哉
進し立帰るに臨て御刀に路費百金を添へ手ずから是へ渡しに与ふ
源太郎は難有君おもひとや感涙を催し無程かたちなして
立帰り暮新顔しなんといひ懐中て我家へ下り徐静に用意


千里亭
正村
眠
圖

あひ折うち大目付迫嘆今お出ゑ〜とうかる迄佐渡と立出れど
縣吏立會うして勇源太所こてく敵孔愚百に不可事あるふりく
永の間おるりのく老早城門延拂ふべ〜とや渡されぬまば異ゆと
ちうきゆて私宅へ帰りて分者中も今子をとゆへいしまを遣〜妻
衣重うて門くまでゆ又迎ん傳手とりとあて動静を知うせ遣す
旅糧あ〜仰国と高ゆ知うぐ〜めがとうる屋宇めぬ乃ちあど仇の
立所と暑んと先城門と立出れば

正村衣重復挙 併 速水雅沢命 条

鹿野苑軍太夫を想ひ出ひ仰下源太命を遣出〜今で早校を良
入れあんと想ふゆよ衣重を源太命孔動静と聞とうもるふ

あ〜きび別荘と出ぞ源太命孔姉を義ひ孔ぬきば早校出奔
あ〜あるよ〜城門へ風〜軍太夫大ふ警孔潜を迎〜く八秋林命も
弟を多く出源太命を義ひ行〜と美人ふ仰ゆ多源太命城
討て校早校を奪ひ仰国へ出迎んと同〜手早に用意を彩〜
城門を抜出ふ校よ身迫ふ〜と孔を高〜出迎ゆ世奇吳
なる一品ゆう唐土隨ち暗帝廣王産前ふ生出る西天州といる華
徃昔を言とい源人千華と高く日〜打渡りしを何なるゆ
推津家代と孔と孔ゆ孔ゆ世州乃奇特とゆ。義を孔を渡る
時ゆ其ゆ不死身と孔ゆ〜名汲城ゆて切ると〜ども出身を孔ゆ
ちうば又ゆ不死〜あるゆ一刻乃ちにを孔を捕る孔を

難生ぜんとおもふ事一珍る奇代乃物なれば国人平日孔子源へ
をいせ一當夏出平あり給る折ふし軍太夫殿世物の話を聞て
盛敵しんとん様あり給ぶ能はる節しと遠を慕ひ盛敵光孝に
浄く偏一遠ちどもかる大切に品なれば一藩中まで注義尚し
軍太夫も庶持是の庶気味悪く果技ば幸に代あ推津宮を
立退んと兼ん様ぬる也くを偉ひく那西天草を懐中し
只越退誹謗ふ推ぶ様ふと逐天地さりされば衣重八勇
源ちらう沼を慕ひ本街乃と走一九三四里も来りぬとと
想ふ時人ち足弱さて馳ぬ道を辛ふ思痛く始りく四
夕陽平頃ばんそせけども注まぶ平懐といるを力拉来よ

慌敵ふ折こ来あれ軍太夫を世乃節とん様く馳来りが遠眼ら
それと見あれ宮を敬んでなけるを入るよう衣重八大ふ驚ひ這者
我退くよ来さるれ為ん何ら心地を通ん今く想ふも軍太夫八
衣重をとらへ汝ごれまで参ひ源ちふ沼を追ふその事ふ為ぶ
集ち扶ぶ為れ浪士とそも世を延連行ふ通て探ん
必ずあれ赤々ふ侍ひさ人と只況加ふる方見憂何幸賜て
軍太夫を訪く捨世雑を避だやと意を極ふ人ら果ても
情の人一交ふ一ハ中ふ来ふ人ふ寒ハ源ち前どの中
沢ある也特とこれ申せ一ど命れ一く来を振捨出く程の
原ちらどの人為情ふ人ふ思ひ出ふ世身を君に

打伏せ切らせんと咲嘲傍こく軍太夫が指添援取童一刀中く
切付れど不審無き鹿野苑茂手も負ず口惜や女は腕乃
甲冑又ちさと又振上る其手をとらへ揺取捻と捻上
衣重が締る腰帯まで切る鎧上倩は招の大木よ礎と
結付大の眼を塞ぎしこいつく汝が意よ不使面目ならば
手向ひせんとふ敵奴さこそに随ひ鏡一清ん
左手を左手に生置ぐと腰刀を内りひて威一えべれど
衣重ハ蓄起ーよ軍太夫どの品身情のあるく禁を解地
寄ーー添ちぐどのふ逢ず千弱ぐ迫る夫と如迫人と打撞く
吳夫重る妻よ泥びと身を捻り進て来ぬし夫意ーと

延上れども此道ハ家遠くなれ為ば義よ
人孔途絶くこん〳〵ざるふぞ軍太夫ハ勢く想ーくこと云る柔きって
魔ろ女いけ亜て生敵乃所源ハ原太しを為墓ハ
と猶えり松の木〳〵水乃及ず突ば呼と叫び魂消る聲し
打振ひやよ軍太夫 数さびころせ女ハ一金ひるあ為地とあらこ佳よ
却ぐ屋地やと眼逆立髪乱さる懼ー地光景ぞ軍太夫 為涙咲
泣ず手ず憂ひし難ひ分ぐ迷ず姉い紛れ日月汝と原太所し説話せるを
嘉やず糸ず原ぐ山ず沢を討れ仇を殺んと志ぐ一ー其時 老者伐
切害ぐ一ー ハ形いよ軍右夫とも新ぐ原ぐ地虚気物眼の
前よ行よ墓と化とも志ぐ一と為墓ハ

源を帝に奏へ衣を賜ふの圖

源ちかゝ手ゝこれより追掛傷拳を切て陰に沈よう遣ひ
三条迄追つよ待合せうと手ゝ衣重を弟ゝ踏口情や珍奇や
老早手ゝかゝと初るあゝぶ仕様極板ひるゝあ義ふつけて高ゝ
源ちかゝどの敵ハ鹿野荒軍太夫にてまふゝそなゝ源ちかゝ
動静臺一言ちゝせんやと大聲上て法叫ぶ息の根止んとする切り
同ゝ切てらまゝ義れさよ刎るむゝ（源ちかゝハ）て色ゝ義なれど
城内を出くよりと号賢村ゝ到り久秋長者屋方へ立寄りひゝく
ん形変他邦に出ばとゝ号賢村ゝ事苦馬亜世通筋ゝ抑ぶ
遠に女の叫ぶ様仕事ゝとゝ衣重を衣重を夢身切望れ蒼昆
ゝ村ゝ一命力勝開眼先へ夫ゝ祝ふれとゝるよう教と上様



源ちかゝ義ゝ文を付ハ軍太夫よて妾し手迄ゝ出光景といふ百も
あゝせび出光の及源ちかゝ刎と周よりも踊跳く鹿野荒見様やとれ
軍太夫ゝ刎ゝ出ちかゝ仇敵山ゝ計ゝ義ゝ事始ゝ勇
源太郎正村敵乃敵妻の仇敵妻せよと指付ゝ身を変て
丁度留黙ゝ絞立世寄祥働くゝ我ゝ死ゝ居ゝ緑あれ
ゝ我ゝ世等夫婦諸苦ゝ我手ゝ地ゝ源ゝ国ゝ様ゝ刀の引導
ゝ老早早枝ゝ追跡ゝ義ゝて切込白刃ゝ源ゝ流ゝ大光ゝ敵
今限ゝと切ゝ源ゝ来歩ゝ手練ゝ多ゝ推ゝ時を移世ゝ正村
武術様ゝ面ゝ軍太夫ゝ切跟れと西天ゝ徒ゝ光ゝ
軍太夫事苦せび手抓ゝ刎太刀の陰ゝ歩ゝ肩ゝ肩ゝ刎ゝ

あるぬかど軍太夫は肩先より乳のうへまで切さげ
らきぬとだうに倒れなげく有金とかせう起りんと遂逃ところを
殺よう大地へ白刃突き通す跳退冷笑いうよ源太郎ノ家名あるや汝も
半点手練の切先某甚感賞せり今軍太夫ふ差ちるを黄泉れ
去るとの仮くく秘女房ふ対面せよ汝等如者何程の術ありとも系
御地獄あめば老早ふ椎津ふ帰ふ西天草ふ我手にぐれば及ばうよう
矢柏さま我身ふい不法跟ふ之儕も汝れ魂ふ消ふんと吸弄悪口源太郎
苦紀ふとほつと徳俵ふ西天竹と奪ひ一ふ汝ふてありつる所程まる
極悪人西天草を所持做ひよ北んば汝等ふ紀ふ晴くとふ討れドもを
為ふ汝ぬ父とう妻とう復讐迫ふ汝ふ金を溜ふ殘念や

さう形ぶう魂ふ冥途ふ赴くふる魂を世ふ出ふ復讐ふ為紀ふと懐恨の
勢ひ流石ふ軍太夫ふ身の毛立くおがめば面倒べと捕て仕ふ出ふ双よ
悶死ふ為ふ蔵紀源ふ為ふ有金ふ白刃ふ果ふれ世ふ先年
自来也ふ拾ひ取ふ倍吉ふ楽ふ養育ふて成長ふ伝ふ伝ふ倍吉帝
ふ子ふ為ふ美貌の少年故自来也ふ為ふ這ふ色ふ嬰児ふ
書を教武義ふ為ふ成熟練ふ大人ふ成ふ為ふ及ふ
然ふ歳不待人ふ為ふ光陰矢ふ如ふ倍吉帝今年十六歳ふ
成ふ為ふ兼ふ自来也ふ話ふ源汝社勇源ふ為ふ三村ふ者ふ
児子ふ為ふ汝ふ祖父ふ為ふ老人扶死ふ時ふ汝ふ山ふ拾ふ助ふ
帰ふ為ふ事ふ汝ふ仇ふ為ふ討ふ——と那

其二

系圖を乃せ教訓あ一ぬれど駿ぶべくもあら西原 大高乃妻子駿蔵
自来也ゑ高足おこと孔駅よりも孕地事を深く感銘一茶雅山に
あるを多ぶ越後ふ拉ぶく自来也百捕られ囚獄を通れ出されぶ
行清ゑ知れぬとゆのく一ぶ何卒立所を擽求尋逢んと想ひ立
先那地ふ到り重静を嶺ひ原来祖父乃仇をも仇せ一う人まて
討取度ぬりひもあれぐ自来也を尋ず一誘共ふ他邦ゑり出ず
こてゑあるぐうもたられ拉バ勇侶吉郎の名を色速氷雅次郎と
名乗り旅粧一て書一個信濃なる黒姫山を立出越後路さして
急一が此平幡乃松原ふ差掛る頃一も日ハ西山に落入て宵闇
なる怪一やくをあや迄曲者血乃ぬぐふ鳥れ出ん通り拉れ原たの

下ゑとんは単太夫切込乃身をかい一潜うと拉合又打撃るを注意
切先余りく雅次郎が弓手ゑ拉ふ拉し一れどもゑ付波ハ盗賊
なるやあ、主恨ある人を討果せ一あらバ旅宿地某ゑるまから
されども血速ふく助勢のものと想ひ及向ゆり但一山賊夜盗の類
形くで乃乃乃ふ余と断んと好手不仏合大夫の一言単太夫も
切ふし旅客乃たもなくバ罪造りふまを益なりと意ふ想ひ乃剣
為取一散ふ暗ゑ紛ふく逃行後月代上ハバ白並のでく原ゑく
夫婦ゑり亡骸もあるくとみ〳〵るまで雅二ハ前後を評定
一個あくぐ二個まで手あり(ケ)ゑり曲者素行あるるけら不便のさ女
乃るゑのよ来りし家を乃て人の足音ゑるくゑ出ぐと乃とし

謚しそさらんと做折柄付ろ流るゝ血汐を眼眼今清留切先のさて手
我手に中しこと拭ひ取らんと懐中より紙をりぶんもちに流るゝ血汐を
添太郎が死骸よかるる者寄乃因係手ひれ血汐ひとゝ多り纏ひ聞くく
流れるやうに雑ち帰ることれまきをつけ他人れ血ーれ八別れどる無助八
ひとつよ轢と つ多び形らしぶ多やそれと添太郎の懐くよと指流て
紙八を摘り出しーを改めで中ちる一紙よ勇添太郎と検しる名蹟八
あるを月明りよ透ーー讀取作て那ーー這也我文子よくくちハせ乃佐社
血汐ち轢りし釈子の緑ちてあり注るよちちの上八此婦人八母人ちを原
やうと血汐を潅バ同じく一川よ集る血筋ちる懐を身れで添太郎ちり社
章よ阿衣重どの苦ちふしとちるーーぬる中ハ妻俣の動静をちるる色
敵を尋ふ出るまで偽ちる形紀又母ぬくるるよびくふ仏潜くどの沈
墓ひ事くく母人ハ此実説と不多ちあび唯ち逃先ーハ又無況嘆
計ーーも事ちるや何ち せよの那曲者きくハ形ーーと身強ひ逃行
ぬんハちれぬどれど何国近りと近ちるる

自来也説話巻之三終